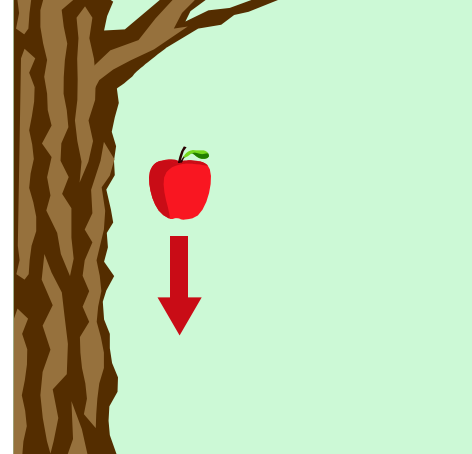


なる



Bブロックにエントリーされた全12作品を公開します。

覇者となったのは果たして誰??

<http://www.columnland.net/> にてごらんください。

「成る」

人間は将棋の駒のような感じなのかなあ、と最近思う。

「香車」は周りなんか気にせず我が道を進む

「桂馬」はひねくれながらも一段飛ばし

「歩」は着実に一歩ずつ足を踏みしめる

子どもの頃は常に前を向いていた。

足元なんて気にせず、ひたすらがむしやらに走っていた。

でも大人になるにつれてだんだんみんな、「金」に成っていく。

自分の足元を確認して、ときには横へ、ときには後ろへと移動する。

別に「金」に成ることは悪いことじゃない。それは自然なことなのだから。

でも、子どもの頃の純粋さ・ひたむきさを「金」に成ったことで失ってしまう気がするのにはなぜだろう。

それは私の思い込み？それとも――

「金」に成るか成らないかは人それぞれ。

『不成り』で活躍する駒だっていくらでもあるのだから――

千里の道も一歩から

突然ですが、

「皆さんは大人ですか？」

変な質問だと思ったかもしれませんが、「はい」か「いいえ」でお答えください。
たぶん、半分ぐらいのひとは大人であると答えるでしょう。

では、そんな方にお伺いします。

「いつ大人になったのですか？」

こちらの質問はかなり曖昧で即座に解答できる人は尊敬に値します。一般的に成人式を迎えると社会に大人であると認められるのですが、高校生ぐらいでも自分は大人であると答える人もいるでしょう。だから、〇〇歳になった時に大人になった、またあることを経験したときに大人になったとはつきり答えるのはまず難しいのです。それはまったく不思議なものです、いつ大人になったかわからないのに大人になっているのですから……。言ってみれば大人になったのではなく、気づいたときには大人であったのです。社会に出てみたり、いろいろなことを経験したりしてフツと考えてみると自分が大人になっていたことに気づくのです。

こういつてしまうと自然に大人になれるのだから努力は必要ないと考える人もいるかもしれませんが。しかし残念ながら、それでは決して大人になることはできないのです。子供であり続けようとする人はいつまでも子供でいられるし、ニートはどんなに年齢が満ちていても大人にはなりきれません。

面白い例があります。日本に留学してくる外国人は口をそろえて「日本人は子供っぽい」というそうです。しかし、日本人は努力をしてないかといえば、そうではありません。受験勉強や残業などの時間は先進国でもかなり上位にくるでしょう。では、何が悪いのでしょうか？教育？それとも親？いろいろな意見があるのですが、すべてはひとりひとりの問題なのだと思います。現代の日本人は他の人が動いてくれるのをまって決して自分から動くことしません。しかし、他人が何かするのを待っていては何も変わらないという事にそろそろ気づくべきなのです。自分から動かなくは何も始まりません。自分から踏み出す一歩が大人へと繋がっていくのです。

— お金のなる木 —

「お金のなる木」は家で簡単に育てられる観葉植物で、最近人気のおまじないのようなものである。僕はそんなものは一切信じていなかったから、僕の旧友であり悪友でもあるKがそれを手に入れたと自慢しても別に何とも思わなかった。彼だつて、勝手にお金が増えるような都合のいい話がないことくらいは知っていたはずだから、まさかその木に本当にお金がなるとは思つてはいなかっただろう。

Kが嬉々とした様子で僕を呼び寄せたのは、それから一週間ほどしてからだった。Kは木になつたくるみ大の実を一つとると、机の上において金槌で割つた。細かい破片の中に、確かにしわくちやに折りたたまれたお札が混じつていた。僕は驚きの声を上げて、出てきたお金をよく観察した。彼は僕よりももっと興奮していて、どうしてお金になるのか、この先もずっと実があるのかというようなことをひっきりなしに僕に尋ねた。こうして、Kは木を毎日怠りなく世話するようになり、木は毎日怠りなく実をつけた。

僕たちがこの木についてのもう一つの真実に気づいたのは、木がだいぶ大きくなつてからのことだった。そのころKは、最近よく物をなくすそばやいていたが、それはKの不注意のせいだけではなかった。お金のなる木が多くの実をつける日には、より多くより高価なものがなくなっていることがわかった。僕たちは、お金のなる木が、彼の身の回りの物を一種の栄養分としてお金を生み出しているという結論に達した。このままでは彼の持ち物がすべてな

くなつてしまふとわかつて、僕たちはいつまでも木を眺めているわけにはいかなかった。

しかし、Kはその木を処分するにしてはあまりにも木に愛着を持つてしまつていた。Kは心底困り果てて、どうやつて処分したらいいか悩んでいた。いや、解決策はいくらでもあつたはずで、結局は彼の心が弱かつたのがいけなかつたのかもしれない。とにかく、彼がすぐに振る舞いを決めないものだから、不気味な木はいよいよとめどなくお金を生産し、彼の持ち物を奪つた。彼は日に日に衰えて見え、買ったものがその日のうちになくなつてしまふようになって、やつと彼は僕に救援を要請した。僕が鋸を持つて彼の部屋に到着した時には、彼の部屋のものほとんどすべてなくなつてしまつていた。Kは泣きそうな顔で、自分にはとてもこの木は切れない、頼むからお前が切ってくれと言つた。僕はできるだけ根元に歯をあてて鋸を挽き、ついに木は倒れた。彼は疲れ切つた中にも安堵の表情を浮かべてありがとうと言つた。その日は、そのまま何も起こらなかった。

次の朝、僕はとてつもなく大きな不安に襲われてKの部屋に向かつた。彼は部屋にはいなかった。代わりに、がらんとした部屋のまんなかにはぼつりと、昨日の切り株がおいてあつた。切り株からは一本の新芽が顔を出し、その根元に、いつになく大きい、茶色い色の実がなつていた。

七時半の舞台裏

「死亡されたときには最大で7920万円支給されます。」

大手保険会社の生命保険スタンダードプランだ。これでもう7件目。私は生命保険適用の例外にあたるらしい。それもそうだろう、この体では。

先輩の黒田さんが亡くなってから、既に6日目だ。黒田さんだけではない。幹部の指示で毎週数えきれぬほどの同僚が死んでいくのだ。気が狂うような黒い日常に染込んでゆく自分。

若さで駆ける！——ベテラン社員が懇切丁寧に指導いたします

某派遣会社のチラシにある短期間高収入を謳った広告に騙されて先週も多くの若者が入社してきた。心が痛む。なんとか救ってやれないものか。しかし、私にはそれを語るすべがなかった。どちらにせよ、今日で終わりなのだ。

先輩の形見の黒いスーツを身にまとう。心なしか、黒田さんの温もりがのこっている感じがした。もうすぐ自分も先輩のところへいきます。結局このまま死ぬことになるけど、とりあえず人生は全うしたかな？

「総員、配置に付け！今日こそヤツを殺るのだ！」

「イーーッ」

広告の隅に小さい文字でこう書いてある。

戦闘員になって新しい自分に生まれ変わろう！

たまが家にやってきたのは、蟬の声が途絶えがちになる8月の終わりのことだった。

ベットショップの、当時人気がうなぎ登りだったハムスターのケージの前で、当時小学生だった私は泣いて親に買ってもらうようせがんだのだった。斯くして我が家に、初めての生き物がやってきた。名前はたま。卵みたいに小さくて丸いことから、私が自分で名付けた。くりくりとしたつぶらな目。自分の爪先程の手足。つるつるの毛並みに触れてみると伝わる、優しい温度。

自分とは全く違う形態の生き物がちゃんと呼吸をし、生きているという事実は、私にとって少なからず衝撃的なものだった。

毎日餌と水を換えてあげた。たまが自由に遊べるように段ボールで運動場も作ってあげた。たまに食べさせようとひまわりの種も取ってきたし、自分のヨーグルトを分けてあげたりもした。

たまはどんどん成長し、初めて我が家に来たときの2倍は大きくなっていた。

最早手づくりの運動場はたまには小さく、ハムスター用のボールにたまを入れて走らせた。ひまわりの種は一袋300円の大袋で買うようになった。

月日は流れ、私はたまをケージから出して遊ぶことは少なくなった。世話係は私から母に移り、私は徐々にたまの存在を忘れていった。

たまの毛は皮膚病で抜け落ち、最初の頃のつるつるの手触りはもう戻らなかった。『そろそろ』なのだと気付いても、なんとなくそれは遠い未来の、自分とは関係のない類の話だった。私の意識には、たまの存在はちっぽけなものでしかなかった。

あの時のたまに今でも思う。ごめんね。もっと遊んであげればよかったね、と。

別れの日は突然で、私は初めて金属バットで殴られたように後悔と空虚さを突きつけられ、大声で泣いた。謝っても、謝りきれないことをしてしまったのだと、漸く気付いた。

生きているということ。そして死ぬということ。その境目はあまりにもあっけなく、あまりにも素っ気なく存在するのだと、たまがいなくなった時やっと気付いたのだ。

霊というものがいるならば、たまの墓を通る度に感じる何とも言えない感覚は間違いなくその所為だ。

名も知らぬ大きな木の下に眠るたまに、私は今も心の中で手を合わせる。大きく光る一等星に、たまがなれたならばいいなと思いつながら。

近代人類の進化

類人猿、猿人、旧人、新人

人間が進化してきた祖先たちである。この進化が遂行し、現在の人類に至るまでに約500万年が経過したのだが、今日の一部の日本人達は、一人の人生のうち、しかも、生まれてから30年ほどのうちに同等の進化を完了させているように私には思われる。以下にその進化の過程を記述する。

ルイージ

類人猿

永遠の脇役である。世間で決して主役^{マリオ}になれない存在である。

主に10代前半での形態である。

去る人

猿人

脇役である事が嫌になり、世俗から離脱した状態である。別名、引きこもりともいう。母親と群れをなして生活している事が特徴。この頃になると独り言が発達してくる。

主に10代後半での形態である。

ゲーム人

原人

コミュニケーションの手段として、言語を捨てコントローラーを用いるようになる。夜行性。太陽光を嫌がる。

主に20代前半での形態である。

求人

旧人

世俗の人間の就職先が決まりだす時期に、自分だけ見つからずに焦っている状態である。3つくらいバイトをかけ持ちしていたりする。夢や自分探しといった言葉を好む。

主に20代後半での形態である。

ニート

新人

最終形態である。仕事探しもあきらめ両親のすみかに寄生している。二足歩行をあきらめ始める。主食はもっぱらカップラーメンである。自らの遺伝子を後世に残す気も無い。

主に30代前半にこの形態に最終進化する。

ねがわくば

たとえば神さまがいるとして

神さまはわたしの髪の毛まで一本残らず数えているんだって

ちなみにわたしは今日お風呂で十七本抜けて、あとイライラして二本抜いちゃったけど・・

そんなことまで、てちよっと 重い

たとえば神さまがいるとして

わたしたちは体、一人一人はその部分なんだって

誰が欠けてもダメ、てこと

それってちよっと心強いかも

わたしは今にも力ケそうな爪を見るといとおしくなる

たとえば神さまがいるとして

こうなることわかってた？

それってすごく イジワル

たとえば神さまがいるとして

神さまは耐えることができない試練は与えないんだって
でもそれってわたしのこと過信しすぎ

—あの日、何も言えなかった

逃げたんだ

強くなりたい 強くなる

お願い

もっと空見て歩きたい

びわの実

びわの実の沢山なる木が通学路にある。俺たちは、学校の帰りにそこでびわの実をとって、食べながら帰るのだ。道路に皮と種を食い散らしながら帰るのは面白いいし、美味い。お母さんが、ジャスコでバックにつまったびわを買って来てくれたけど、あれは全然おいしくない。やっぱ学校の帰りにあのこの食うのがうまいんだよな。

その日もいつものようにびわをとろうと、畑の横の道に入った。その木は畑の横にあつて、道路からは2Mぐらい奥に並んでいる。ちようど食べ頃の実を探していると、いきなり「勝手に盗るんじゃない！」

って怒鳴られて、俺たちはあわてて走って逃げた。今まで怒鳴られた事がなかったからびつくりした。悪いことって分かってるけど、いいじゃんか、ちよつとぐらい。俺たちは、怒鳴ってきたババアの悪口を言いあつた。

それから、あそこのびわはとると怒られると噂になって、とる奴が一気に減った。でも高学年の男子は変わらずとつてたし、俺もとつて食べてた。ただババアも作戦をとつてきて、びわの実を白い紙で包んできた。それは果実を商品として出荷するときに使うのだと、家が農家の友達が教えてくれた。でも、あんな二、三本のびわの木で出荷なんかしないから、偽者だよ、とも教えてくれた。しかし、白い紙の威力はなかなかで、白い紙がついているのをとるのはかなりの勇気がいる。なんか、罪悪感みたいのがあつて、俺は仕方ないから白い紙のついてない、下とか裏の実をとつて食べた。味は多少落ちるが、でもうまかつた。

また、ババアの監視も頻繁になつてきて、怒鳴られた事のある経験者が増えてきた。俺もこれまで計2回怒鳴られた。しかし、そんなことで俺は屈したりはしない。そうして、毎年びわの季節が来るたびにババアとの戦いが行われた。

俺たちが六年生のとき、ババアが死んだという噂が流れた。みんな喜ぶかと思ったら、「かわいそう」とか言つて。仕方ないから、俺も神秘的な顔しといた。でも、やっぱ心の底では喜んでる自分がいて、それが俺だけ子供みたいで、なんか嫌だった。

中学生になつてからは、びわはとらなくなった。部活で帰りが遅くなつて、暗くてよく見えないからなのはあるけど、自販でジュースを買うようになったしね。それからびわの木の事も、ババアの事も、ほとんど忘れていた。

中三になつて、部活も引退して一人で帰っていた時だった。ふとあのびわの木を見ると沢山のオレンジ色のびわの実があつてゐる。久しぶりに食べたくなつて畑に横の道に入つたら、何か違和感を感じて回りを見渡した。

ああ、そうか。畑が雑草だらけなんだ。畑は何年も手入れされていないから、畝もほとんどないし、土も空気のはいったやわらかい感じじゃなくて、踏み固められたように固そうだった。

ババアは一人だったのか。そんな事を思った。俺はババアのこと何にも知らない。どんな人生だったかなんて分からない。でも、ババアは嫌なババアだったってことは忘れないようにしよう。別に同情とかそういうのじゃなくて、俺たちはババアに怒鳴られ、俺たちはババアを嫌いだった事を事実として、忘れないでいようと思った。

久しぶりにびわを沢山もぎ取つて制服のポケットに詰めるだけ詰める。久しぶりのびわは甘く、みずみずしくて乾いていた喉が潤う。無性に走りたくなつて、ババアに怒鳴られたときみたいに、一気に走り出した。

人は死ぬと何になるのだろう

朝、会社へ向かう私は混雑した中央線の中で考えていた。そんな事を突然考え始めたのは、自分に悩みがあるとか自殺願望があるとか、そういうわけではない。昨夜、家に着いたのは午前二時に近かった。終電間際に人身事故があつて長々と途中駅で待たされた。目の前の新聞によると、飛び込んだ人は病院に運ばれたが間もなく亡くなったのだそうだ。

新聞の持ち主と目が合つてしまい、気まずくなる。

昨夜、武蔵小金井で飛び込み自殺をした人は今どうなったんだろうか。人間死んだらオシマイとか何かに生まれ変わるとか魂が生き続けるとかいろいろ言われているけど。自分がまだ生きている以上、どれが正解かはわからない。生物は死んだ瞬間から「モノ」になるのだろうか。しかし数年前に祖父が他界したとき、医師から死亡を伝えられても「祖父がモノになってしまった」とは感じなかった。

車掌が気だるそうに次の駅を案内している。

わからないと言えば、悩んで思いつめて自殺する人の心理もわからない。死んだ後何になるにせよ、今と同じ生活ができなくなることは確かだ。人ひとりがかかえる悩みなんてそんなに深刻に考えなくてもいいものばかりなんじゃないか、と思うのは私が楽天家だからだろうか。しかし会社のT部長はいつも悩んでばかりいる。他人からすれば些細なことでも、彼にとっては重大事であるらしい。

突然、体に大きな力が働いて私は進行方向に飛ばされる

状況を把握するまでに少し時間を要した。電車が急ブレーキで停止したらしい。目の前はさっきの新聞紙ではなく学生の参考書に変わっていた。通勤快速が停まらないはずの武蔵境駅のホームが見える。どうしたんだろう、最近多い踏切の無謀横断だろうか。高架化工事が始まってからというもの、中央線が緊急停止するのは珍しい事ではなくなった。暫く経ったが、電車が動く気配はない。

車掌から死傷事故が発生したため停車しているとの放送が入る

また、か。まったく、人身事故の多い路線だ。今月に入ってから何件目だろうか。しかし自分の乗った電車が事故を起こすというのは初めてだ。自分の都合で死ぬのに、電車を利用して数万人に迷惑をかけるのは頂けない。今、床下で遺体を回収している作業員にとって、それは「モノ」なのかもしれないなどと考えていた。…結局、会社には一時間近い遅刻だった。

武蔵野市在住のT部長がその日以後出社することはなかった

危機

「うわあ！やべえ！明日レポートの提出じゃん！すっかり忘れてた」

「えっ！？もうこんな時間？おいおい、今から頑張って答えを写したとしてもノートの出間に合わねえよ」

「ジリリリジリリリ・・・」んだよ。うるさいな、（カチっ）・・・おっ！まだあと5分くらい寝れるじゃん！んじゃ、おやすみ」

・・・（二時間後）・・・

フウ！よく寝たな（チラッと時計見る）ぬおっ！！（バタバタバタバタ・・・）

大体日常的にある危機をあげてみた。誰しもが経験したことがあるはずだろう。

とりわけ僕はよくこの状況になる。一般的にバカといわれる部類に入る人なんだろう・・・しかし、僕は一昔にある一つの事に気が付いた。

そう、あるコトバを唱えると一気に苦悩で満ちていた心の中が晴れ渡るのである。

しかしこのコトバの本当の効果を得るには心のそこからそのことを信じることが重要なのである。

このことをみだしそのコトバを唱えれば、そのときは本当に苦難から解放される。

・・・・・そう、その時はね・・・

またこのコトバには中毒性もある。何回かこのコトバを使い解放されるとき快感を覚えてしまうと、たちまちそのコトバばかり言うようになってしまう。僕も中毒者だ。最近なんて「好きな言葉」の欄にこのコトバを書いてしまうほどである。

さあ、そろそろこのコトバを公表しますか。まあ大抵の人はこの時点で気づいているのだろうが・・・

「なんとかなるさ！！」

これが僕を虜にしたコトバである。

しかしあまりこのコトバは他人に聞こえるように言うべきではない。

他人の前であつげらかんとこのコトバを言うと、あるコトバが耳タコになります。

「お前って、バカだな」！」というコトバがね・・・

インザ・ルーム

「あたし昔から動物園の飼育係になりたかったのよ」

この世には言葉では説明のつかない不合理的な状況が確かに存在する。例えば僕は、付き合って半年、初めて彼女の家に招待されることとなった。

ドアのチャイムを鳴らす。はいと返事は聞こえるが、いっこうにドアが開く気配はない。手をかけると鍵はかかっていなかった。不用心だなど思っていると奥の部屋にいるらしい彼女の声が聞こえた。

「今手が離せないの。悪いけど勝手にあがって」。

とりあえず玄関で靴を脱ぐ。それにしても妙だ、何か生臭い。

……いや、生臭いとは少し違う。そうだ。これは確か昔飼ってたカメの水槽の匂いに似た——

ふと右を見た。

ワニが口を開けて寝ている。

「……………」

気を失った僕が目覚めたのは三十分後のことだ。

トビラの向こうは動物王国でした。

目眩がする。部屋の中は大小さまざまな動物達で混み合っている。通勤ラッシュの電車よりキツイ。

ふと昔見た百一匹の犬の話を思い出した。あれを飼うのは大変だろうなと思っていたが、ここはそんなレベルじゃない。

「ううん、残念だけどまだ全部で九十九なのよ。あのワンちゃん家族には及びません」

……いや、なんかあたしつてまだまだなあみたいなこと口走ってるけど、どう見てもお前の方が上だぞ。

あつちは一種類だが。

ここは九十九種類だ。

「サブタイトルを見てもらえばどうしてこうなっているのか説明は不要だね。だってなりたかったんだもの」

「無茶言うな。だいたいここアパートだろ。動物飼っているのか？」

たとえ初めは許可されていた物件だろうと、ここまでにないば管理人が黙っちゃいないと思うのだが……。

「その問題ならもう片づけたわ」

「片づけた？」

「大家さんごと」

「大家さんごと？ お前自分に住む部屋を貸してくれて、いる善良な大家さんに何をした！」

「家賃も安くしてくれて助かるわ」

僕の中で今まで築き上げられていた彼女の人物像が急速に崩壊していく。いや、初めから幻想だったのかもしれない。

「お茶よ」

「……………」

羊が一匹。……寧ろ湯のみを僕の服の上にこぼして走り去っていた。アシがはい。うわ、ビショビショじゃねえか。

「もう、あの子つてば。上質な毛皮が汚れたらどうするの」

「……確認するが僕の優先度はこの中でどのくらいだ」

「そうだねえ、下から数えた方が速いね。それも圧倒的に」

「圧倒的に！？」

「マウス以上モルモット以下ね」

「幅が狭い！ しかもどんなにがんばっても実験体だ！ 僕はお前の恋人だろ！？ この半年間そんな目で僕のことを見てたのか！？」

「ああ、そういえばもうそんなに経つんだね……。そうだ、いつそ同棲でもしようか。この家なら広くて安いし——」

「しみじみとそんなこと言うムードじゃない！ それにその提案はもはや地獄からの招待にしか聞こえねえ！」

同棲、これ以上ないうれしい申し出のはずなのに。

そんな時僕の肩に赤いシルエットの美しい鳥がとまった。

これは確かコンゴウインコと聞いたつて。

ふうむ、鳥は動物で一番好きだ。いつだって慰めてくれる。

「名前はセザンヌだよ」

ツッコむ気力もない。

「セザンヌ、アイラブユーって言ってるら。アイラブユー」

「……無視されてるぞ。お前嫌われてるんじゃないのか？」

「あたしに逆らったら焼き鳥だぞ☆って言つたじゃない！」

「日頃からそんな無慈悲な命令を！？」

「うるさいなあ黙っててよ。それより言いつけに従わないこの子を今から炭火で——」

「やめろ！ 僕の前で鳥類に手を出すな！ 焼かなきゃならねえのはお前のその思考回路だ！」

その日。僕にとつては初めての彼女の家。女の子の部屋って緊張するな——とか、そう思ってたあの頃が懐かしい。

そのあとも、そのまたあとも、暴れて暴れた彼女&動物。この中にいると自分も大自然の一部なんだなあと感じたりすることは全くなかった。そんな余裕はない。

ああもつ今日は全身全霊で家へ帰りたい。

疲労のピーク。なんだってこんなことに。

……一番の問題はこれでもまだ彼女を好きだということだ。くそ僕も異常だつてのか。あの同棲しようという言葉が今になって脳裏に浮かんで来る。

彼女と一緒に生活。プラス、動物たちと一緒に生活。

ジレンマ。いや、板バサミどころじゃない。トラバサミだ。しっかり掴んで離さない。

「それにしても」と彼女は言った。

「きみと話してるとどうにもオチがつかないねえ」

「叫びすぎてそんな体力はねえよ、何だこの家は」

「オチつけた？」

「落ち着けねえ——！！！」

銅線のかなた

五月二日、午後七時

とある六畳間の隅に置かれた電話の前に

正座する一人の男がいた。

ちまたは明日からゴールデンウィーク。

この男の四日間が、天国となるか、地獄となるかは

彼女への一本の電話にかかっていた。

「今年は四日間だからなあ、絶対棒には振れないっ。」

口からの意気込みは十分な男の指先は、小刻みに揺れている。
そんな男を漆黒のボディに映し、電話機は沈黙を保っていた。

「えいっ」

先ほどまで揺れていた人差し指は、糊付けしたようにピシツとし、
軽やかにボタンをプッシュしていく。

いく度もの発信によって焼きつかれた、

忘れることのない、彼女への番号を…。

プッシュ音の後の、受話器からの沈黙。
交換機が聞いている、高鳴る男の鼓動。

『ボッ』

（つながった…）

二十秒ほど経っただろうか。

彼女の返事に、跳び上がり歓声をあげる男がいた。

『東京地方の三日は、北東の風、晴れでしょう。沿岸の海域の波の高さ…』
「よっしゃあ。潮干狩り三昧だあ。」

男のゴールデンウィークは、天国となったが、
今は、ひどい日焼けと、山のように残っているあさりの、地獄を味わっているようだ。

コラム番号	コラムタイトル	点数	順位	特別賞
		まじょコメント		
A01	変化する物	3 pt	9 位	0 sp
		各パラグラフがバラバラのようできて、音・高校・大人……とゆるやかに意味がなくながってゆく、そのなだらかさがこちよく読めました。 前向きにしめくくったのもいい読後感で、晴れて表紙ゲットです。		
A02	たんぼぼ	3 pt	9 位	0 sp
		ヘラクレイトスを足場に、昨日のたんぼぼ/今日のたんぼぼ、昨日の自分/今日の自分、止まっている物は存在しない、だから「ある」ではなく「なる」なのさ、という論理展開が説得的でした。まさにお題にジャストミートの哲学思考。 ラストが惜しい。ミモノなんてひとごとのようではなく、もっと自分の決意として語りたいかった。		
A03	気になる君	0 pt	11 位	0 sp
		うーん、TA一同、7～8人がかりで考えるも謎。コンサートに出かけたって話なのかなあ、という結論になりましたが、さて。 使われている言葉は親しみやすいのに、状況がほとんど見えて来ないのです。実体験をもとに起こしたから、自分だけが分かる部分が多くなってしまったのか?? 作者さん、求む解説。 イチオシフレーズ：「ホント、深みがないなあ」		
A04	NARR ～愚か者が夢中になること～	6 pt	8 位	1 sp
		ファンタジックな寓話。便箋ごしの会話という間接的なやりとりが、お互いに考える間（ま）を保っているようで、すうっと気持ちになごみます。白から青色、ピンクと色が変わる効果は絵本的でもあって。 ときにナルはナルシストのナルでしょうか。 特別賞：ナルシーから脱皮で賞		
A05	ナル	21 pt	1 位	1 sp
		「自分のために死んでるってすごくない?」という問いかけに深ーくうなづいてしまいました。自己犠牲と真逆の、逆転の発想がこちよく刺激的。 蘊蓄と主張がバランスよく配されて、得た気分の読後感。首位をさらったのも納得です。おめでとうっ! 特別賞：細田賞 イチオシフレーズ：「ナルシストの皆さん。」「自分にほれ込んで死ぬ覚悟はおありですか??」		
A06	子どもに戻りたい大人、大人になりたくない子ども	12 pt	2 位	0 sp

		ひとつひとつ、着実に考えてゆく地道さが、しっかり共感を呼び込んでの価値ある二位でした。 二つを対比したところから論理展開をした着想とともに、終わり近くできちんとまとめを行っている律儀さも良さですね。 ただ、結論がちとありきたりだったか。大人/子ども両方の立場から複眼的に何か問題提起できると、よりふくらみが出たように思います。
A07	UZUMAKI	10 pt4 位1 sp くるくるくるくる恋心は転がってはっぴいえんど。 なると、へ行ったところが意表を衝いて、すてきに楽しい仕上がりでした。ういういしい感情の描写もこなれていて好印象。 ただ、ストーリーの「場所」と「時」が不明です。文化祭間近。教室？ 食堂？？ それにしても、前回のプリングルスといい、なぜに賞品のネタ元は無念の4位なのかなあ。。。 特別賞：ニヤニヤしたで賞 イチオシフレーズ：「うどんには正直カマボコの方が合うと思う」「やっぱカマボコよりなるとだ。」
A08	空	0 pt11 位1 sp 「数分前、僕は空気になった。」——この表現がインパクト大。空気になった僕、願い通りに行くはずが.....環境汚染と社会問題で攻めてきましたね。 地球が自転している間に、お隣の国の黄色い大地へ流されていったかわいそうな僕、という設定でしょうか。宇宙サイズで発想したのびやかさがGOOD! 短時間で読むセッションでは、なかなか評価の出にくい作りでしたが、それでも「深いで賞」を授与した読みの深い班（A-4班）があったのは、選ばれた作品のみならず、選んだほうもリッパだと思います。 特別賞：深いで賞
A09	ちょいと寂しいお話	11 pt3 位3 sp 今という人生の時期を一日にたとえた発想が、きれいに効いています。アンパンマンが楽しい。こういう発想って、「自分ならn時だな」と各人各様の想像を誘いますよね。 それだけに、全体をこの発想で一貫させてみても良かったのでは。 特別賞：愛と勇気だけが友達さ賞/しみじみ賞/変換ミス賞 イチオシフレーズ：「トクになし」「アンパンマンまだー？」×2「大事にしたたアンパンマン号もアルバムの中にしか現れない」、アンパンマンのおかげでイチオシフレーズ大賞ゲットです。
A10	天敵——朝	7 pt6 位1 sp そこまでやるんだアヒルの計量カップ。 タイトルだけでなかみの想像が付いてしまうのに、すてきに愉快地読めるのは、工作の苦心がリアルに語られているおかげだと思います。このリアルさ、実体験と推定。 特別賞：努力賞 イチオシフレーズ：「あら、まだいたの？」
		10 pt4 位0 sp

A11	中高生的一天	「どなる」が秀逸。動詞の意味がころころ変わるところが楽しかったです。 せっかくなので、大学ヴァージョンを聞いてみたい気が。1年後でよいので。 イチオシフレーズ：「まだまだ眠くなる・ん・じゃ・・Zzz」「Zzz」
A12	課題。	7 pt 6 位 7 sp 「午前3時」のところで、まだ間に合うじゃん！ というツッコミ待ちの体制を整えた策士でしょうか。 せっぱ詰まった感は狙ったのでしょうか、やや淡泊か。もっとジタバタ感を漂わせたい。 それでも連休明けのフロアのムードをしっかりと味方に付けて各賞総なめ！ の快挙でした。おめでとう。 特別賞：マイブーム賞/短いで賞/よくやったで賞/ナルシスト賞/短かったで賞/シンプルで賞/今日はコレで賞 イチオシフレーズ：「午前3時」「なるようにならないと困ります。」

[Bの部]

コラム番号	コラムタイトル	点数 まじょコメント	順位	特別賞
B01	成る	15 pt 2 位 0 sp 来ました将棋ネタ。駒のひとつひとつに生き方を反映させて、きっちり「なる」でまとめて。主張もずっと伝わってきて読みやすいです。 そんな思いがきちんとフロアに伝わって、あまたの技巧派作品を凌駕しての二位ゲット、おめでとう！		
B02	千里の道も一歩から	0 pt 11 位 0 sp 質問で読み手を引き込むの工夫が光りました。こうすればカタイ話題でも、読者が実体験を振り返りつつ参加してもらいやすいですね。 ただ、せっかくの質問が後半の主張にうまくつながっていなかったところが改良の余地ありか。		
B03	お金のなる木	11 pt 5 位 1 sp うわあ、怖くて巧い！ 茶色い実にぞくっ!! すばらしいです。 何でもお金に換算してしまう世の習いを寓話として皮肉ったのかなと推量しつつ、でもそんなさかしらな意味づけはいつでもよいくらい、すてきにおもしろい！ 特別賞：Kくんに同情で賞		
B04	七時半の舞台裏	4 pt 8 位 3 sp ショッカーですかそうですか。(←調べないとネタが分からなかった旧人) 冒頭が引きつける巧い書き出しですね。妙に細かい数字がリアル。 本文のどんでん返しは、もう少し撮影風景とかを描き込みたかった。 特別賞：ショッカーで賞/裏のヒーロー賞/ショッカーで賞 イチオシフレーズ：「イーッ」「若さで駆ける！」		
B05	星になる	2 pt 9 位 2 sp 悲しいストーリー。悲しいから小さい文字で、ということもないのでしょうか。もう2ポイントくらい大きくしたほうが良かった。印刷って、どうしても字がつぶれちゃうので。 「生と死の境目のあっけなさ」を語ったところが、ぐさりと印象的で、実体験なのかな、全体に気持ちがいっしょに合った言葉たちでした。それだけに字の小ささがほんとにもったい！ 特別賞：賞/アウトローで賞(←ハムスター好きが班にいたので、だそうな)		
B06	近代人類の進化	20 pt 1 位 5 sp わはははは。よくぞここまで組み立ててブラボーです。 もう最初のルイージから持っていって、さいごまでテンションとぎれず。ネタ師の今後に大期待。 特別賞：廃人賞/がんばった賞/特別賞/発想が奇抜で賞/新人(ニート)賞 イチオシフレーズ：「類人猿(ルイージ)」×7 「新人(ニート)」×2 「世間で決して主役(マリオ)になれない存在である」と驚異的なルイージ人気でイチオシフレーズ大賞も受賞。 おお、首位のみならず、特別賞×5、イチオシフレーズ×10と三冠達成、史上初の快挙です。おめでとう!!!		
B07	ねがわくば	1 pt 10 位 0 sp 神さま神さま、小さなお願い、丸ゴチックのいじらしさ。 自分よりとてつもなく大きなものを思う事で、少し上を向ける気分になる。そんな心が飾り気なく語られて、応援したくなる素朴なあたたかさでした。		
		12 pt 4 位 0 sp		

B08	びわの実	「ババアは嫌なババアだったってことは忘れないようにしよう」——このくだりがスゴい！ と驚嘆しました。たしかにね、死者をむやみに美化するのではなく、嫌なものとして、自分自身の思い出のカタチのままにしっかり記憶する、それこそが死者への最大の尊敬と言えそうです。 情景描写も味覚の演出もすばらしい仕上がりだけれど、何よりこの一節にぞっこんなのでありました。
B09	中央線通勤快速	14 pt 3 位 2 sp ああ中央線。また急停車。 ヒトゴトと思っていたらグサリ。日常に闖入してくるラスト 1 行の重みに圧倒されます。 小見出しのようにダッシュでつないでゆく語りの工夫もうまいなあ。 特別賞：文章力賞/独断賞
B10	危機	0 pt 11 位 0 sp なんとかなるさ。明るい響きの中毒性セリフ。 実感こもって語られて共感を誘うのですが、できればラストにツッコミセリフも「なる」でまとめたかった。そんな小工夫で、全体の好感度がぐっと上がると思います。
B11	イン・ザ・ルーム	6 pt 6 位 0 sp きつとね、彼と彼女をプラスして 1 0 1 匹って、そういうことだよ、とTAさんたち大騒ぎ。 爆笑また爆笑のネタ尽くし。おみごとでした。 イチオシフレーズ：「!!!!!!?」「あたしに逆らったら焼き鳥だぞ」「落ち着けねえ——!!!」
B12	銅線のかなた	5 pt 7 位 2 sp ロマンティックに見せかけて、ラストも実はネタ。「彼女への電話」にころりとダマされました。くやしいことに。クラムチャウダーにしてやるっ。 特別賞：裏切られたで賞/落ち賞